

'98年金融アウトルック

机の前に筆ペンで「従流志不変」と書いた紙が張ってある。ある雑誌に出ていた言葉で「流れに従い志を変えず」と読む。とても良い言葉だと思いい、座右の銘にしようとして自分で書いてみたものだ。いつの時代も変わらぬ真理があるとすれば、この言葉で表わされるように「貫くべき不変」と「適応すべき変化」への頑ななこだわりではないだろうか。

しかし現実には厳しい。上の言葉をもじって言えば「流れに乗って志を変える」ことの方がずっと多いように見える。バブルの発生とその崩壊、そして今日に至るまでの時間の経緯は、志を守り、しかも環境の変化に適切に対応して行くことがいかに難しいかを私達に教えてくれた。

今、金融の現場でもかつてない変化が起っているが、果たして金融業界に「変化への対応力」と「貫くべき志」はあるのだろうか。今年度の金融の行方をざっと眺めてみたい。

96年秋のビッグバン宣言から昨年1年を通してははっきりしたことは、グローバル化した金融の世界ではアングロサクソン系に敵わないということだ。ざっくりと言えば、日本の金融機関は欧米勢の傘下に入る格好でその軒先を貸すことになる。競争脱落の原因を追求しても最早仕方ない。それを黙って受け入れ、前向きに考えた方がいい。

今年一層明白になるだろうこの流れが、日本の金融を考える前提条件になる。そうした意味でビッグバンは既に始まっているのであり、後退も撤退も有り得ないと思うべきである。

マクロ的見方は上記の通りだが、ミクロ的に見れば銀行は戦後最大の危機に直面している。この痛烈な逆風を切り抜ける方策は、「不変なるもの」を掘出し守りながら自らを大胆に変える他はない。しかし、合意と横並びの古い秩序から脱却するのは容易ではない。自らの力でこの隘路から抜け出られる銀行は少数となるだろう。

今、銀行を中心とした金融機関が抱える問題を列挙してみると大凡次の通りとなる。

- 1) 生産能力過剰
金融機関の数が多過ぎる。護送船団により数だけは揃ってしまった。
- 2) 収益力に劣る

量の拡大を追求した結果、図体は大きい収益力に劣る体質が出来てしまった。

- 3) 技術力(運用力)に劣る
規制で守られてきたことも一因。
- 4) 横並び・閉鎖的体質の保持
どこの金融機関を見てもこれといった特色がない。経営の透明性も低い。

ざっとこんな所であるが、これを変えて行くのは簡単ではない。不良債権問題はもちろん大きな問題だが、それ自体は1)~4)の帰結に過ぎない。その意味で日本の金融システム最大の問題は、良く言われるような巨額の不良債権の存在にあるのではなく、不良債権を解決出来ない金融システムの体質そのものにある。だから問題の根が深いのだ。

おそらく今後3年以内に、日本の金融機関は内と外からの強力な力が加わることにより、相当の再編・淘汰が進むだろう。そして、それは避けられないことと覚悟すべきである。

では、そうした金融機関と取引をしている中小企業はどのような影響を受けるのだろうか。

まず認識すべきは、日本の銀行は過剰な貸出に苦しんでいるということである。銀行の過剰融資は、取りも直さず企業や個人の過剰債務に他ならない。早期是正措置の実施1年延期という対症療法が発表されたが、それでも銀行は粛々と不効率な資産の圧縮を進めて行かざるを得ない。銀行は既に「還らざる河」を渡り始めたのであり、引き返すことはないと思わなければならない。

年明け早々厳しい言い回しになってしまったが、ごまかしても仕方ない。従来と同じような感覚で銀行に頼っても失望するだけだ。中小企業も出来るだけ銀行を頼らない体質を作らなければならない。

「不変」と「変化」の狭間で悩み多き年になると思うが、最も暗い部分はもう過ぎたと思う。その先の明るさを求めて進みたいものである。

§お知らせ§

国民公庫・中小公庫でも「金融環境変化対応貸付」の取扱いが始まりました。一般融資と別枠になっているようです。詳しくはお問合せ下さい。

最後になりましたが、本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。